群教セ	G01 - 02
	平15.216集

国語科における「話すこと・聞くこと」の学習支援ソフトの作成と活用

― 伝え合う力を高めるための話し方の基本技能の習得 ―

特別研修員　　片柳　進（明和町立明和西小学校）

《研究の概要》

本研究では、小学校国語科領域「話すこと・聞くこと」の話すことに視点を当て、話し方の基本技能を児童が習得できるようにする Web 形式の学習支援ソフト「話じょうず」を作成した。この学習支援ソフトを小学校５年国語科の「話すこと」に関する授業に活用することで、児童が伝え合う力を高めるために必要な話し方の基本技能を身に付け、相手を意識して分かりやすい発表ができるようにした。

【キーワード：国語－小　話すこと・聞くこと　伝え合う力　話し方の基本技能】

Ⅰ　主題設定の理由

小学校学習指導要領では、国語科の目標の中に、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う能力の育成を重視して、伝え合う力を高めることを位置づけている。この「伝え合う力」とは、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりする力とされている。

「伝え合う力」は、全教育活動の中でも、さらに広く日常生活の中においても極めて重要な力であり、子どもたちにしっかりと身に付けさせたい能力の一つである。現在、社会において青少年の表現力不足、語彙不足、それに伴い他者とのコミュニケーション不足から安定した関係が保てないために、ちょっとしたことで「切れて」しまう現象が問題視されている。そういった社会的な背景からも「伝え合う力」を高めることは非常に重要なことである。

国語科においては新たに「話すこと・聞くこと」の領域が設けられ、計画的な指導がなされることになった。また総合的な学習の時間においても、学習成果を「学習発表会」という形で伝え合うことが盛んに行われるようになった。しかし、これまでの国語科をはじめとする教科等の発表の場面でよく目や耳にしたのは、聞き手をあまり意識することなくひたすら原稿を読み上げることに終始したり、声が小さかったり、読むスピードが聞き手にとっては速すぎたりというような自分本位の発表の姿であった。本来、伝え合うために発表することは、相手を意識して行われるべきことであり、相手にとって分かりにくく、内容が伝わらない発表では伝え合ったとはいえない。しかし、一生懸命ではあるが、原稿を一方的に読み上げ、資料を提示し説明して終わりという発表の姿を変えようとする児童はほとんど見られなかった。

この現状を改善するためには、相手を意識して分かりやすく話すという基本的な話し方を身に付けさせることが不可欠であると思われる。それには、言語活動の中心となる国語科の学習において、「話すこと」の指導を児童の発達段階に応じて系統的に行うとともに、指導内容を明確にし、児童一人一人の習熟度に応じた指導を進めていく必要性を強く感じた。以上のことから、話し方の基本技能を習得できるようにするための学習支援ソフトを Web 形式で作成し、発達段階や個人に応じて繰り返し活用すれば、児童は話し方の基本技能を身に付け、相手を意識して自らの言葉で分かりやすく話すことができるようになると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校国語科領域「話すこと・聞くこと」の、話すことに関する指導において、伝え合う力を高めるための、話し方の基本技能を児童が習得できるようにする学習支援ソフト「話じょうず」を作成し、その有効性を、小学校５年国語科における「話すこと」に関する授業実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

小学校国語科の、話すことの指導に関する児童の実態を踏まえて、発達段階に応じて身に付けるべき話し方の基本技能を明らかにし、それぞれの基本技能を練習できるように Web 形式で作成すれば、「話すこと」に関する授業に活用できる学習支援ソフト「話じょうず」ができるであろう。そしてこのソフトを、児童一人一人の実態に応じて活用することにより、それぞれが話し方の基本技能を身に付け、発表の場面において相手を意識して自らの言葉で分かりやすく話すことができるようになるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　学習支援ソフト「話じょうず」の概要

(1)　基本的な考え方

本学習支援ソフト「話じょうず」は、主な対象学年を５年生として、領域「話すこと・聞くこと」の「話すこと」（自分の考えを資料を提示しながらスピーチすることなど）が、生き生きと行われるために必要な基本技能を習得できるようにすることを目的とするものである。音声や映像などを取り込み、以下の点に留意しながら Web 形式で作成した。

ア　発達段階に応じた使用

話すために必要な基本技能を、小学校国語科学習指導要領に示された、各学年で身に付けさせたい言語事項と照らし合わせて、６つの項目（話し方のきほん・聞きやすい話し方・わかりやすい話し方・相手を引きつける話し方・話すときに大切なこと・話じょうずになるために）に分類し、発達段階によってどこからでも学習できるようにする。そのために低学年からも活用できる部分については、表現はできるだけ平易なものとし、内容も興味・関心をもてるように工夫し、親しみのもてる画面構成を心がける。また、トップページから学習したい内容を選択できるようにする。

イ　個に対応した使用

繰り返し練習が必要なものについては、音声や映像などを取り込み、見本を聞かせたり見せたりしながら、何度でも個々に練習できるように工夫する。また個々の学習状況に則して、本学習支援ソフトを使えるように CD-ROM 化する。

ウ　心情面の指導

児童は、話し方の技能の練習や資料提示の方法などに関心が向きやすい。そこで、話し方の専門家であるアナウンサーに取材したことを生かして、技能的な面だけでなく、相手に何を伝えようとするのかなどの心情面も大切であることに触れる。

(2)　学習支援ソフトの構成

本学習支援ソフト「話じょうず」の構成は以下のとおりである。なお、領域「話すこと・聞くこと」に関する指導資料として、「教師用資料」の項目を付け加えた。

（学習支援ソフトの構造図）

- トップページ
  - このソフトの使い方
  - 教師用資料
  - (1)話し方のきほん
    - ・姿勢・呼吸・発声
  - (2)聞きやすい話し方
    - ・声量・高低・速さ・間の取り方
  - (3)わかりやすい話し方
    - ・話す相手のことを考えよう　・話す相手に合わせた準備をしよう・話のテーマをはっきりさせよう・話の組み立て方・話の整理のしかた・話の方向付け
  - (4)相手を引きつける話し方
    - ・体験したことを話す　・数字を使って話す
    - ・反対の考えも入れて話す・道具を使って話す
  - (5)話すときに大切なこと
    - ・目くばり・身ぶり・話しかける
    - ・ユーモア
  - (6)話じょうずになるために

2　学習支援ソフト「話じょうず」の内容

トップページには話し方の基本技能（話し方のきほん・聞きやすい話し方・わかりやすい話し方・相手を引きつける話し方・話すときに大切なこと・話じょうずになるために）を示し、それぞれにリンクを設定して、児童の取り組みたい項目へ進んでいくことができるようにした（図１）。示した基本技能の順番は基本から応用へとなっている。また、「このソフトの使い方」のページも設定した。さらに教師用資料のページへのリンクも設定した。

図1　トップページ

(1)　話し方のきほん

この技能項目は、姿勢・呼吸・発声の３つの部分で構成され、これまで見落とされがちであった基本的な指導事項を児童に再確認させるためのものである。画像や音声を取り込んであり、児童が自分のペースで手本を聞きながら、何度も練習することができるようになっている。

「発声のページ」では最初に母音の発声練習を取り上げ、この練習によって、普段あまり気を付けることのない口形を意識させることができる。右端のアイコンをクリックすると、発声の映像と発音を聴くことができる（図２）。その

図2　母音の発声練習

他に、ことばの教室担当教諭より紹介された、発声練習のバリエーションを練習できるページがある。

(2)　聞きやすい話し方

この技能項目は、声量・高低・速さ・間の取り方の４つの部分で構成されている。「声量」のページでは、話す相手の数や空間の広さによっても話し方が変わることを理解することができる。また実際の練習方法として、体育館等を使って声量を調節する練習方法を紹介している（図３）。

図3　声量の練習方法

さらに、標準的な聞きやすい話し方の速さを体感させるために、「一分間スピーチ」練習の項目を設定した。どうしても速さがつかみにくい児童に対しては、アイコンをクリックすると手本を聞くことができるので、それに合わせて発声することで、標準的な速さを理解できるようにした。

(3)　わかりやすい話し方

この技能項目は、話す対象である相手を意識して、相手に合わせた発表の準備をすることや、分かりやすい話し方の基本技能を身に付けることから構成されている。これまで自分の発表内容のことしか考えられなかった児童に対しては、「発表準備メモ」をプリントアウトして記入させることで、話す相手を意識した発表準備ができるようにした。

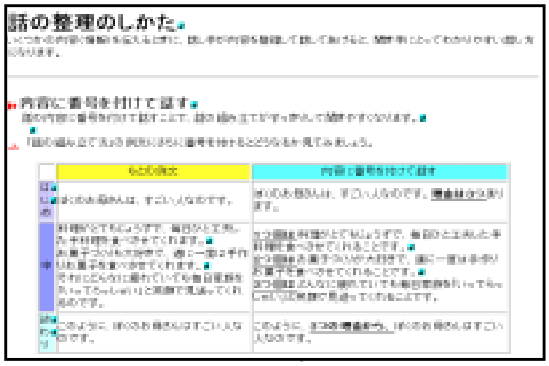

図4　話の整理のしかた

「話の整理のしかた」のページでは、話す内容に番号をつけて整理しながら話すことにより、相手にとって聞き取りやすく、分かりやすい話し方になることが理解できるようにした（図４）。

(4)　相手を引きつける話し方

この技能項目は、自分の話をしっかり理解してもらうためにはどうすればよいかという内容から構成されている。特に「反対の考えも入れて話す」のページの内容は、児童にはこれまでほとんど意識されていなかったことである。自分の意見とは異なった考えなどにあえて触れることで、押しつけではなく、相手に共感的に理解してもらえることを身に付けることができるようにした（図５）。

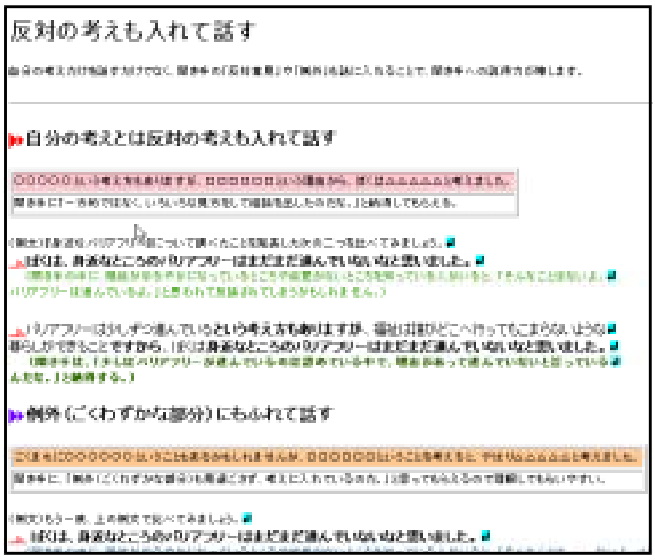

図5　反対の考えも入れて話す

「道具を使って話す」では、話の内容を言葉だけで説明することにこだわらず、様々な道具を意図や目的に応じて

使い分けることで、より分かりやすい話し方になることが示されている。これにより模造紙だけでなく、提示方法が多様にあることが理解できる（図６）。コンピュータとプロジェクターによる提示方法というと、「パワーポイント」（マイクロソフト）や「はっぴょう名人」（ジャストシステム）などのプレゼンテーションソフトを使う方法が考えられるが、操作方法や提示方法に児童が気を取られすぎてしまうおそれがあることには十分留意したい。なお、各道具の画像をクリックするとそれぞれの活用場面の映像を見ることができるので、これまでにこのような道具を活用したことのなかった児童に対して、視覚的に説明するとともに、「自分もやってみたい。」という意欲を高めることができるようにした。

図６　道具を使って話す

(5)　話すときに大切なこと

この技能項目は、より相手に話をわかってもらうためにはどのような技術があるのか紹介している。応用的な内容ではあるが、これらの技術を身に付けることは表現方法を広げる意味では大切なことである。「目くばり」のページでは、聞き手とのアイコンタクトが重要であることを理解できる。「聞き手に話しかける」のページでは、一方的な説明口調の発表ではなく、途中に聞き手に話しかけていくことで、積極的に話に参加してもらえることが理解できるようにした（図７）。

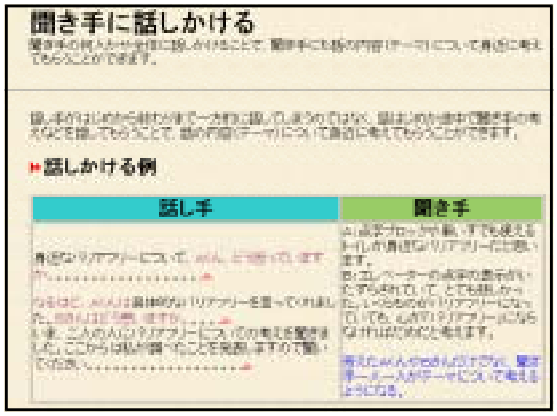

図７　聞き手に話しかける

(6)　話じょうずになるためには

この技能項目は、直接的には話し方の基本技能ではないが、話をする上で重要な考えとして取り上げた。これは NHK の前橋放送局のアナウンス部に電話で取材した際に、「話し方の技能面だけを考えても上手には話せないこと、話し方のプロであるアナウンサーであっても内容についてはっきりしていなければ滑らかに話しても意味がないこと、どれだけ相手を意識して伝えようとする気持ちをもてるかということが大事であること」などを示唆していただいたものをまとめたものである。

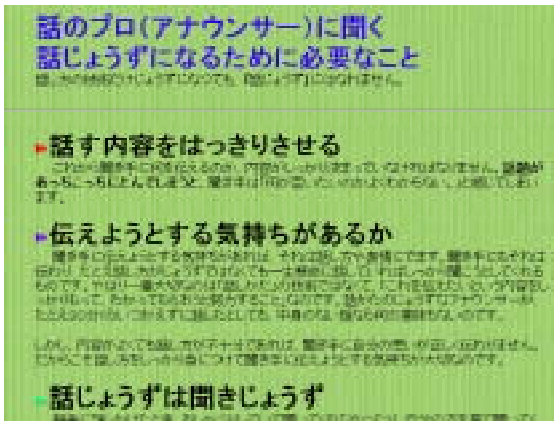

図８　話じょうずになるために必要なこと

3　実践の結果と考察

(1)　授業実践

○　対　象　明和町立明和西小学校５年Ｂ組　30名

○　教科等　国語科　単元名　「自動車工場の見学の様子を伝えよう」（全９時間）

○　単元の目標　発表に必要な話し方の基本技能を身に付け、自分の考えを資料を示しながら相手を意識して分かりやすい発表をしたり、発表者の意図をつかみながら聞いたりすることができる。

ア　指導計画

時間	主な学習活動	学習への指導と支援
1	・これまでの発表場面を振り返り、発表に関しての課題に気付く。〔教室〕	・「発表課題カード」に発表時の自己課題を記入させて今後の学習意欲をもたせる。
2	**・「話じょうず」を活用する①**（発表に必要な基本技能にはどんなことがあるのかを知り、練習する。）〔パソコン室〕	・はじめにソフトの内容や使い方を簡単に説明する。 **・細かく規制せず、やってみたいところから練習を始めさせる。** ・「発表課題カード」に新たにわかったことや気付いたことなどを記録させる。
※	・自動車工場の見学（取材）	・発表のための資料を集めてくることを指示する。
2	**・「話じょうず」を活用する②**（相手にしっかりと伝えるための知識を学び、まとめ作業に生かす。）〔パソコン室〕 ※実際のまとめ作業は社会科	**・実際の発表準備の前に、技能項目の後半を中心に活用させて発表準備に役立たせる。** ・「発表準備メモ」を作成させ、話す相手を意識させる。
2	**・「話じょうず」を活用する③**（話すときに大切なことを確認し、リハーサルに生かす。）〔パソコン室〕 ・発表のリハーサルをする。	**・発表準備ができた時点でソフトを活用してよい発表にするための確認をさせる。** ・自信をもって発表ができるようにソフトの技能を生かして繰り返し練習するように励ます。
1	・学習発表会を開く。〔児童会室〕	・お互いの発表を聞き合い、発表や質問に答えているときの様子について気付いたことをメモにして渡すようにする。
1	・発表会を振り返る。〔教室〕	・渡されたメモを参考に自己反省をして「発表課題カード」に記入させる。

※実際の自動車工場見学の時数は社会科としてカウントし、含まれない。

イ　授業の様子

最初に一斉指導として、このソフトの内容構成と使い方を簡単に説明した後、自分の発表時の課題に応じて個別に活用させた。「自分の見てみたいところからホームページを見るように好きに進んでいいんだよ。」という指示に、それぞれが開いたところを興味をもって画面を見つめている姿が全体に見られた（図９）。またその画面から発表に役立ちそうな部分を「発表課題カード」に記録する児童も多数見られた。手本の音声に併せて声を出して練習するページを開いた児童たちも、始めは周りを意識している児童が多かったが、声を出す児童が出てくると、自然にあちこちで声を出し合う練習が始まるようになった（図10）。

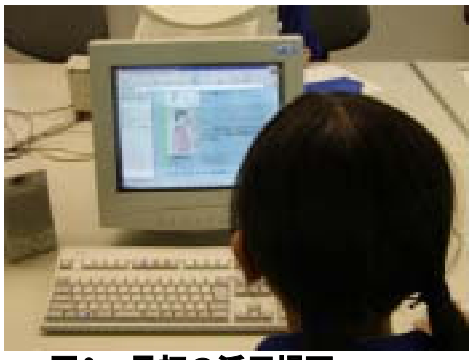

図9　最初の活用場面

図10　声を出し合う様子

２回目のソフト活用場面では、自動車工場見学直後であり、話す内容が明らかになってきたことや発表相手が年下の３年生であることが担任より伝えられたことで、自然と「わかりやすい話し方」から後半の技能項目を選んで活用する児童が多くなった。また指示を出さなくても、ソフトの中から「発表準備メモ」を印刷

して記入し始めた児童も見られた。

３回目のソフト活用場面では、発表準備やリハーサルに意識がある児童はソフト活用を短時間で終了させたが、自分が班の中で中心的な説明をする児童の中には、ほぼ１時間中ソフトを活用していた児童も見られた。

学習発表会については、３年生を相手に自分たちが自動車工場見学で学んできたことを内容別に６つのグループに分かれて伝え、質問に答える活動とした。相手が下学年であることを意識して、ゆっくりと語りかけるように発表したり、興味関心を引きやすいような資料提示の工夫をしたりする場面が見られたほか、相手からの質問を受け、自分たちの言葉によってなんとか分かってもらおうと努力している姿も見られた。

(2)　結果と考察

本単元前に行った発表に関するアンケートでは、およそ８割の児童が自分の発表に満足していなかった。その理由としては、口をはっきり開けられないことや声が小さいことなど基本的な技能の不足といったことから、プレゼンテーションの工夫が不足していることなど応用的な技能に渡るものまで幅広く挙げられていた。したがって技能項目を区分して自分の取り組みたい部分から学べるようにしたこのソフトの形式は個に十分対応できるものであった。

図11　発表会の様子

本単元前のスピーチ体験時には教室の後ろの席では聞き取れなかったほどのＡ子は、個別練習をしたことにより、発表会ではいくらかの緊張感はあるものの、ハッキリした口調で後ろの方まで聞き取れる声で発表することができた。これは話し方の基本技能を知り、自分の発表する形をしっかりと作り上げた（紙芝居形式）ので自信がもてたためであったと考えられる（図11）。さらに本授業実践後の朝の一分間スピーチでは、声量だけでなく話す速さや、間の取り方なども意識して話す姿勢が見られるようになった。

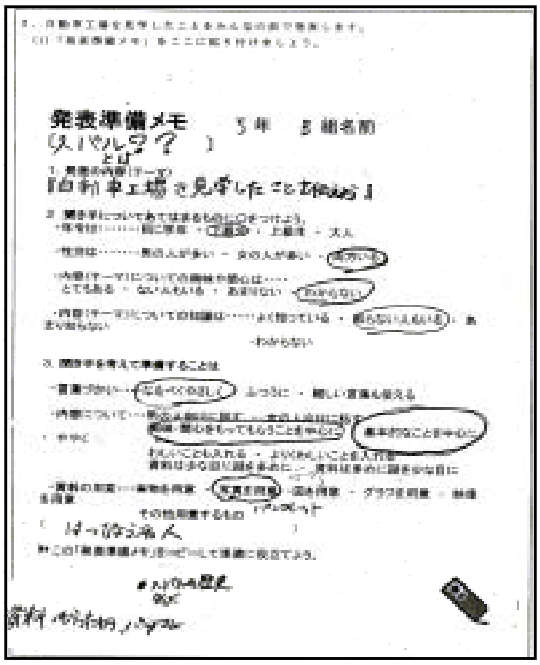

図12　発表準備メモ

また、はずかしがって下を向いてメモを読むだけだったＢ男は、発表準備メモ（図12）をとりながら聞き手となる３年生を意識し、「４ＷＤ」や「日本カー・オブ・ザ・イヤー」などの自動車専門用語の説明をやさしい表現に変え、質問には全体を見わたして話そうとするなど、「話じょうず」で学んだ基本技能を生かそうとする姿勢が見られた。

相手を意識した発表について学習したＣ男は、プレゼンテーションソフトを使って発表してみたいと思いついた。これまでは模造紙に調べたことを事細かに書き記して早口で読み上げるため、分かりにくい発表になっていたが、単に模造紙をプレゼンテーションソフトに置き換えた

だけではなく、同じ班の児童と協力して説明するところと見せるところの内容を選んで効果的に使用し、聞き手から注目を浴びていたのも成果の一つとして考えられる（図13）。

本ソフト活用後のアンケートでは、「話し方のコツがわかって良かった。」、「今まで自分の足りなかったところの直し方がわかった。」、「話し相手によく聞こえるようにする練習もわかった。」などの回答があった。これらの回答から、本単元の学習によって、児童は今後の発表活動に生かせる練習ができたり発表を見直すポイントも学習できたりしたことがわかる。

図13　プレゼンテーションソフトを使った様子

これまで本学級の児童は発表を自分の「行為」としてしかとらえず、「最後まで（用意した原稿を）つかえずに読み切ったらよい発表」ととらえていた。なかには自分の発表に気をとられて、他人の発表はほとんど聞いていなかった児童も多かった。そのような児童も、本ソフトを活用した学習によって、相手を意識し、自分なりに発表の観点をもって発表に臨むとともに、他人の発表のよさを聞き取ろうとする姿が見られた。以上のことから本研究のねらいはほぼ達成されたと考える。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

本研究では、伝え合う力を高めるために必要な話し方の基本技能を、児童に身につけさせることをねらいとして教材を作成し、活用した。話し方の基本技能の中で、ある児童は発音や発声に関する技能をふり返り、ある児童は相手を意識して「発表準備メモ」を作成してから発表に臨むなどそれぞれが必要とする技能を習得することができた。それらを生かして発表会に参加することで、結果としてこれまで自分の発表に不満を感じていた児童の多くが自分の発表に対して満足感を得ることができた。また自分の話をよりわかってもらう「楽しさ・よろこび」を感じることができた児童も多かった。このような体験を今後も意図的、計画的に積ませていくことが児童の伝え合う力を高めることにつながっていくと考える。

なお今後の課題については以下の点が挙げられる。

○　基本技能の習得に要する期間には個人差がある。活用開始時期を年度当初にするか、本ソフトを休み時間にも利用できるようにするなど個に応じた練習時間の確保が必要である。

○　本ソフトの内容については、後半の技能項目は説明が多くなり、文章量が多かった。前半の技能項目のようにレイアウトを工夫して見やすい画面構成にしたり、画像や音声をさらに取り込んだりして児童にとって使いやすいソフトにしていきたい。

○　今回は５年生への実践であったが、今後は低学年や中学年の利用を進めることで早期に話し方の基本技能が身に付き、また活用後の学年別の児童の反応を集めることによって本ソフトの充実が図られると考える。

＜参考・引用文献＞

・堀　祐嗣・研究集団ことのは　『教室プレゼンテーション20の技術』　　明治図書（2002）
・櫻井　弘　『話し方の技術が面白いほど身に付く本』　　中経出版（2002）